

わたしのおかねなのに

よしだかずこ
吉田一子

【前半】

せんきゅうひやくきゅうじゅうさん
一 九 九 三 ねん 四月二十日の あさです。

「きょうは ぎんこうへ 行って、おかねを おろして こなくては
と、おもいました。」

そこへ きんじよに すんでいる むすめの 順子じゆんこが やって き
ました。これ さいわいと、いつものように 順子じゆんこに たのみました。

「きょう ぎんこうへ いくから、また かみに かいで。」
「もう、いつも あさばつかりに いうて。いそがしいのに。」

おこりながらも 順子じゆんこは かいで くれました。
それを もって、えきまえの ぎんこうにいきました。まどぐちには
わかい おんなのひとが すわって いました。

「おねがい します。」
と 行って、かみと つうちようを わたしました。

すると、その おんなのひとは、ちよつとかみを みて、まえの ほ
うを ゆびさしながら、

「あそこに かみが ありますから、もういちど かいてください。」
と、かみを かえして きました。きんがくのところの 0ぜろが 二にじゆ
うに なっているから、おかねを だせないよ というのです。

わたしは あわてました。わたしは うまれてから このかた、じぶ
んの なまえを かいで、ひとさまに さしだしたこと などただのい
ちども ありません。しきじがつきゆうで 吉田一子よしだかずこと なんども ベ
んきょうは してきた けれど、ぎんこうの かみに かくような じ
しんは まるで ないのでした。そこで おろおろしながら、 その

おんなのひとに、

「わたし、じい よう かかんから あんた ちよつと かい て ちよ
うだい。」

と たのみました。けれども、おんなのひとは、

「だめ です。じぶんで かかなくては。」

と 行って、かいて くれません。わたしはもう一ど、

「わたし、じい しらんから、これ、むすめに かい てもらたんや。せ
やから、あんた、すまんけど かい てちようだい。」

と、いっしょうけんめい たのみました。それでも その おんなのひ
とは、

「だめ です。じぶんで かかなくては。」

と いう ばかりです。

わたしは おもわず ぼやいて しまいました。

「じい しらんもんは じぶんの おかねも だされへんのんか。」

問 「ぼやきながら、吉田よしださんはどんなことを考えたでしょうか。」

【後半】

あくる日、こんな おもいは もう したくないと おもいながら、
順子と いっしょに、 きのうの ことを 日きに かきました。
その つぎの 日は 木よう日で しきじがつきゅうの日 です。
わたしは、この 日きを もって、ところと なまえの てほんを か
いてもらいました。

その日から、なんども なんども けいこしました。えんぴつで お
おきく かいたり、ちいさく かいたり、ボールペンで かいたり、も
う なんかい かいとか わかりません。しきじがつきゅうへ いくと、
まつさきに これを けいこしました。

せんせいは、
「この くやしさを、つらくても うんと くわしく かいて おきま
しょう。」
と いわれました。

そうして かきはじめてのが この ぶんしょうです。
これを かく ときが、一ばん たのしくなりました。

「この ぶんしょうは じぶんで かみに なまえ ときんがくを か
いて、おかねが だせた 日まで つづけましょう。その日の ことを
かいて、この ぶんしょうを おわりに しましょう。」

と、せんせいは なんども いわれます。わたしも、そうしたいと お
もいました。

としが かわって 三月二日の あさ です。四月八日から 一しゅ
うかん 四こくに おまいりに いくので、十まんえん ださなければ
なりません。

こんどこそ、じぶんで かみに かい、ぎんこうで おかねを お
ろして こようと おもいました。

「ねん かかって やつと ためた 十まんえんです。これで おろして もらえるやろか、しんぱい しながら、ボールペンに しっかり ちからを こめて かきました。」

それを もって、ぎんこうの まどぐちにいき、おそるおそる、「きょう、はじめて かいて きたんやけど、これで いけますか。」と 言って、つうちようと わたしが かいたほうの かみを さしだしました。

まどぐちの おんなのひとは、にっこり して、

「いけますよ。」

と、いつて くれました。ほっと しましたが、まだ しんぱいです。

しばらく まえに たっていると、

「吉田さん。」

と、よんで くれて、十まんえんと いっしょに つうちようを かえして くれました。

うまれて はじめて、わたしの かいだ じで、おかねが だせたのです。うれしくて うれしくて、なみだが できました。

(『部落解放』408号より一部省略)

問 「なみだを流しながら、吉田さんはどんなことを考えたでしょうか。」

問 「吉田さんのがんばる気持ちはどこからくるのでしょうか。」

小学校6年 道徳

わたしのおかねなのに

- (1) 主題名 目標をもって (A 希望と勇気、努力と強い意志)
- (2) 教材名 「わたしのおかねなのに」 (出典：『なまえをかいた』吉田一子 (自費出版))
- (3) 主題設定の理由

具体的な差別についてほとんど知らない児童が、差別のために奪われた文字を取り戻すために識字学級に通う吉田一子さんの生活つづりかた「わたしのおかねなのに」を学ぶことによって、差別の現実や、それを乗り越えてきた人間のたくましい生き方を知り、人間の生の言葉の重さをかみしめながら、差別をなくそうという心や、自分自身が抱えているさまざまな人権問題を乗り越えようとする意欲を育てる。

また、本時は中学校で学習するであろう、北代色さんの手紙「夕やけがうつくしい」と「教科書無償運動」につなげる上で、小・中の連携を図るためにも適した教材である。

- (4) 学習のねらい
- ① 具体的な差別の現実や苦しみを乗り越えようとする人たちのたくましい生き方にふれ、自分自身のこれからの生き方につなげて考えることができる。
 - ② 識字学級の意義と活動内容がわかる。
 - ③ 自分自身を語ることの大切さやすばらしさに気づき、自分の生活を見直すことができる。
- (5) 育てたい資質・能力
- ・他者の痛みや感情を共感的に受容できるための想像力や感受性
- (6) 準備
- ・「わたしのおかねなのに」読み物資料
 - ・『ひらがなにつき』絵本の挿絵
 - ・E T V特集「なまえをかいた - 吉田一子・84歳 -」 (2010年1月17日放送)

略案

学習活動	主な発問と予想される生徒の反応	教師の支援
1 V T R 「なまえをかいた - 吉田一子・84歳 -」の冒頭部分を見て、吉田一子さんについて知る。	○ 吉田一子さんは、どうして字を書いたり読んだりすることができなかつたのでしょうか。	○ V T R (E T V特集「なまえをかいた - 吉田一子・84歳 -」)の冒頭部分と絵本を使って、吉田一子さんについて簡単に紹介する。
2 資料「わたしのおかねなのに」の前半部分を読んで話し合う。	○ ぼやきながら、吉田さんはどんなことを考えたでしょうか。 ・字が書けないことがくやしい。 ・もう、銀行に行きたくない。 ・勉強して字を覚えれば自分のお金を使える。 ・字が書けないと、自分のお金も使えないことはおかしい。 ・字の読み書きができないと生活ができない社会はおかしい。	○ 読む前に「吉田さんのすごいところはどこだろう。」と考えながら、聞かせるようにする。 ○ 「識字」の取組は、本人の努力だけで解決するものではないことに気づくようにする。
3 資料「わたしのおかねなのに」の後半	○ なみだを流しながら吉田さんは、どんなことを考えたでしょうか。	○ グループでの話し合いでは、多様な意見に触

<p>部分を読んで話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ワークシートに、一人ひとり考えて書き込む。 グループになり、自分の考えを説明する。 グループでどんな意見が出たか、全体で発表する。 <p>4 吉田さんの「がんばる気持ち」がどこからくるのか、話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 一人で考え、ワークシートに記入した後、グループで話し合う。 <p>5 本時の学習を振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 間違っているとされないか心配だったから、安心した。 がんばって字を覚えたことが報われた。 一緒に勉強してくれたことに感謝したい。 これからも、もっと勉強したい。 自分のお金を自分で使えることができるようになってうれしい。 社会に自ら参加できることがうれしい。 字の読み書きができなくても安心して生活できる社会であってほしい。 <p>○ 吉田さんのがんばる気持ちはどこからくるのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 差別へのくやしき 自分もやればできるという喜び みんなと同じことをしたいという願い 社会参加への意欲 将来への希望 支えるなかまの応援となかまへの感謝 <p>○ 吉田さんの生き方から学んだことを書きましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> くじけずに努力していくことは大切だ。 今までの自分は難しいことを避けていたかもしれない。 努力するためには、周りの人の理解も大切だ。 何事もあきらめずに挑戦していきたい。 	<p>れ、さまざまな考え方があることを知ることができるようにする。</p> <p>○ 一人で考えた後、グループで話し合う。その後、他のグループの考えに触れられるようにする。</p> <p>○ 学ぶことの大切さに共感できるように声かけをする。</p> <p>○ 本時の学習を振り返り、学んだことをノートに書くように声かけをする。</p>
--	---	---

【参考】

○吉田一子さんをモデルにした『ひらがなにつき』（文・若一の絵本制作実行委員会 絵・長野ヒデ子 解放出版社刊）が、人権ふれあいセンターでの識字・多文化共生学級の取組とともに、社会科教科書にも紹介されています。

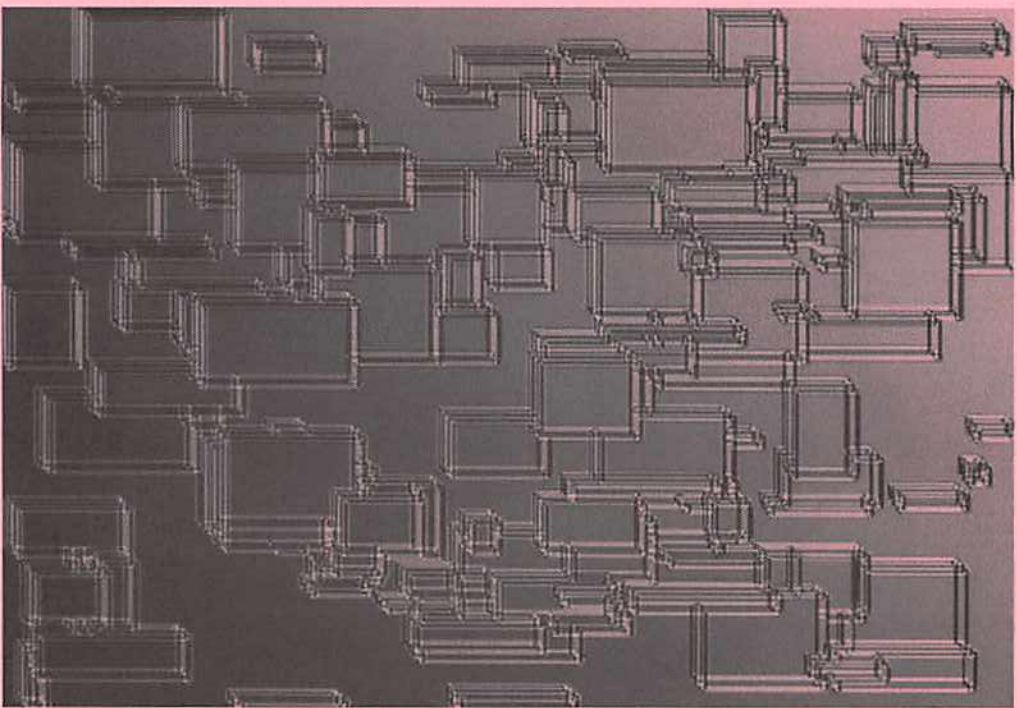
○NHKのドキュメンタリー番組「ETV特集・なまえをかいた～吉田一子・84歳～」でも、吉田一子さんの学び、生きる姿が紹介されました。

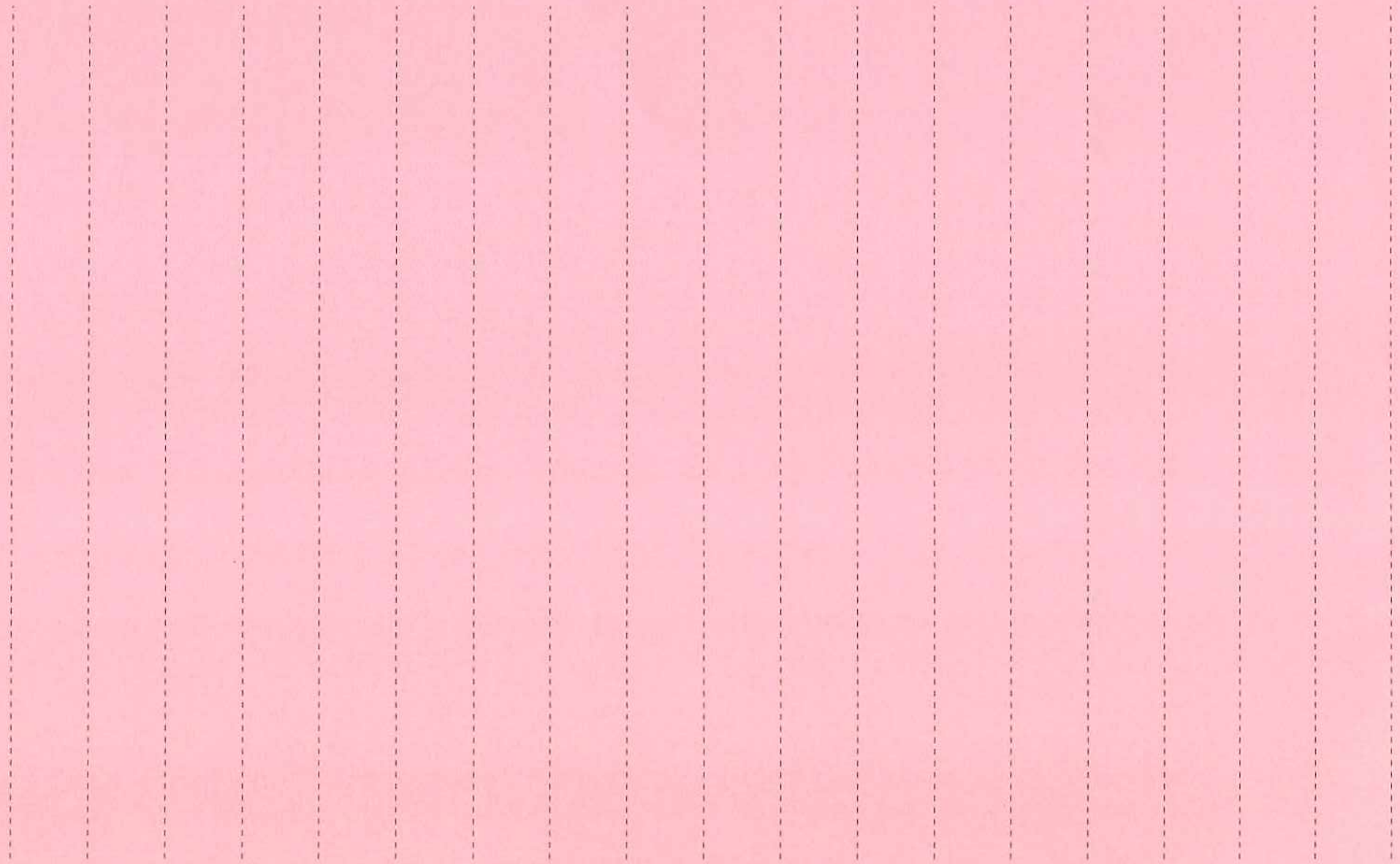


よみ・かき・ことば集^{しあわせ} (二)

わたしのおかねなのに

よしだかずこ
吉田一子





わたしのおかねなのに

よしだ かずこ

吉田 一子

おとどし 一九九三ねん 四月二十日

の あき です。「きようは ぎんこうへ 行って、
おかねを おろして こなくては」と、おもいまし
た。こうせいねんきんが 三まん五せんえん はい
っている はず です。そこから 三まんえん だ
け おろしたいと おもいました。

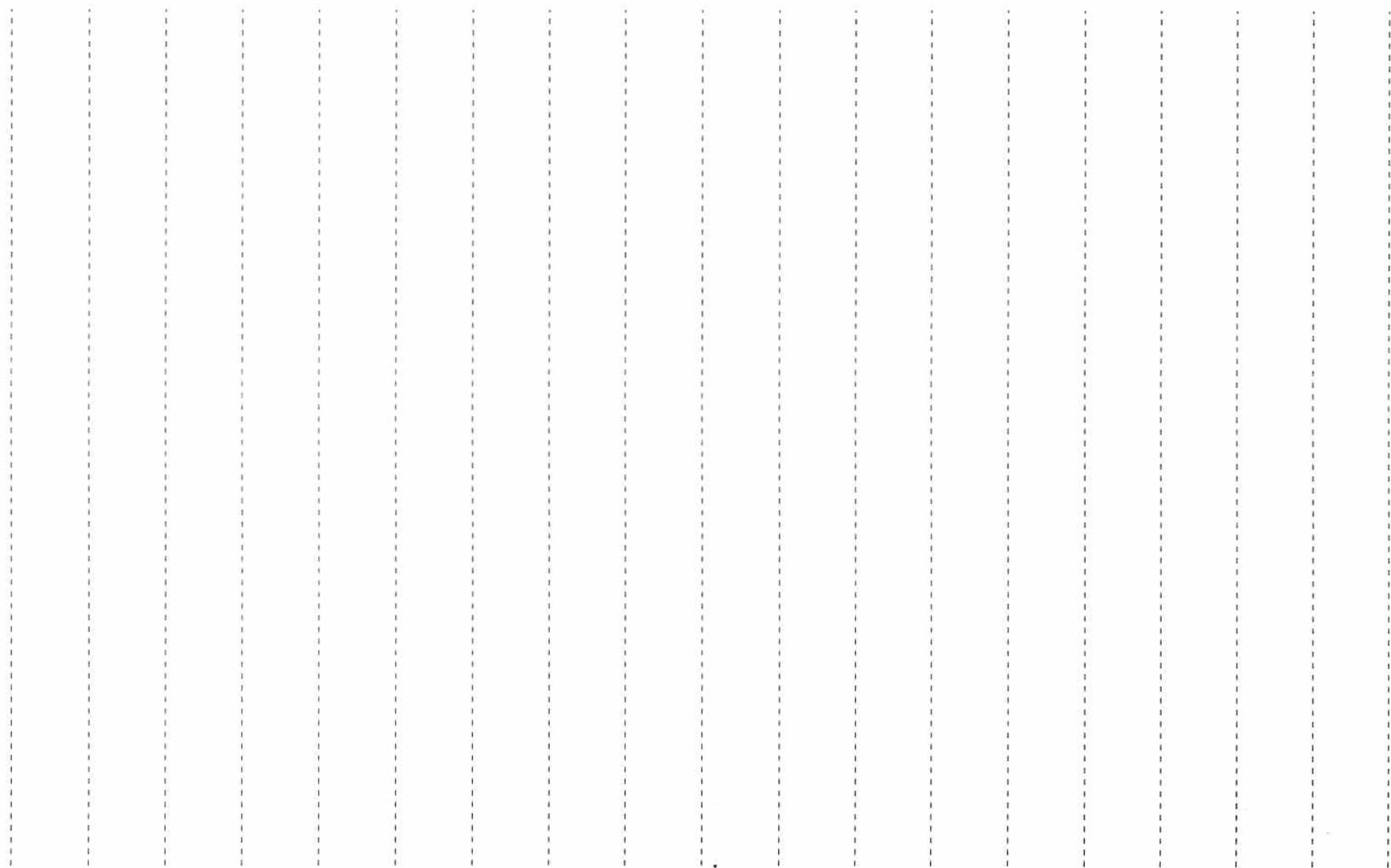
そこへ きんじよに すんでいる むすめの
順子が やって きました。これ さいわいと、い
つものように 順子に たのみました。

「きよう ぎんこうへ いくから、また かみに
かいて。」

「なんぼ だすんや。」

「三まんえん。」

「もう、いつも あさばつかりに いうて。いそが
しいのに。」



おこりながらも 順子じゅんこは かいて くれました。
それを もって、えきまえの ぎんこうにいきました。
まどぐちには わかい おんなのひとが す
わって いました。

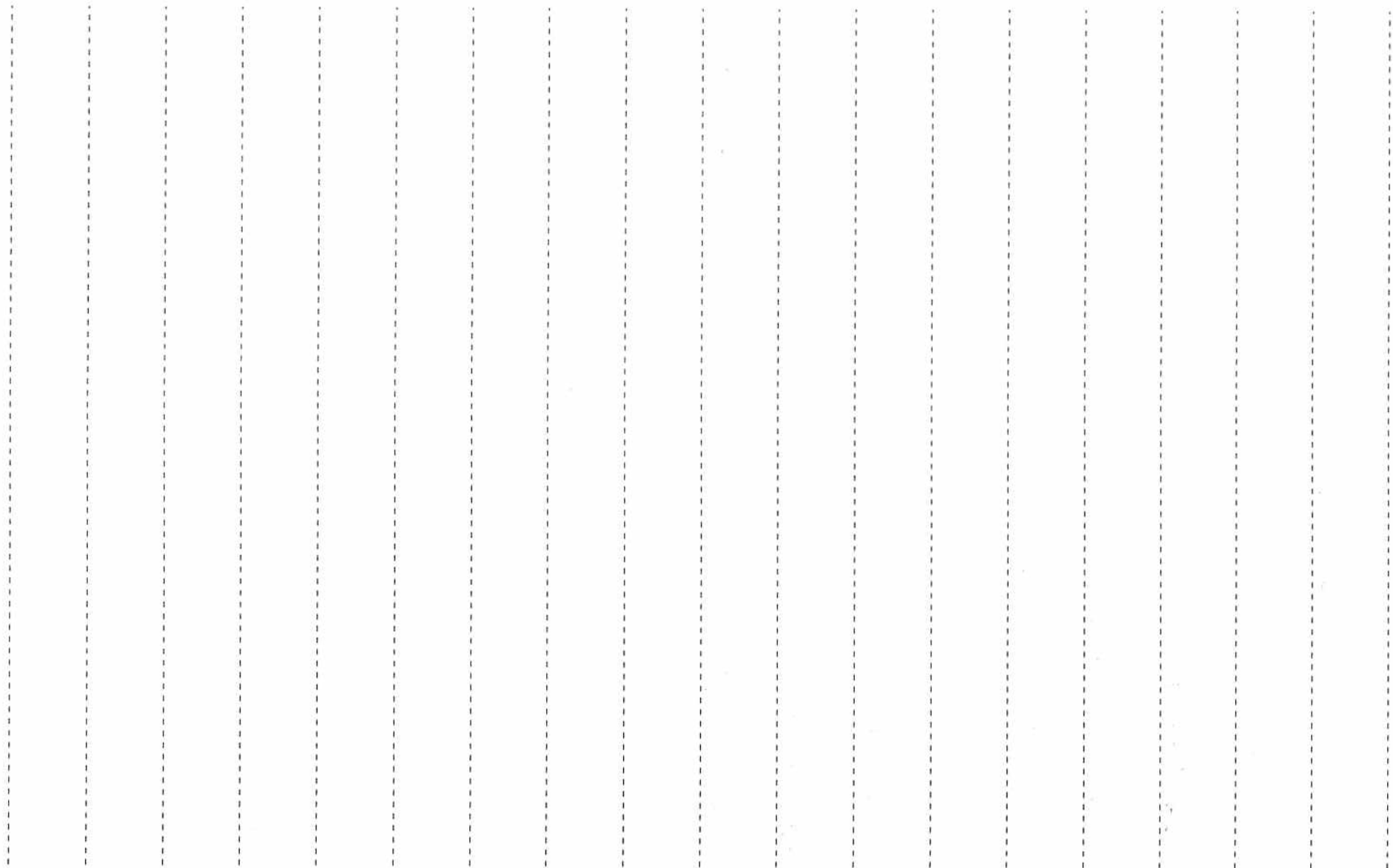
「おねがい します。」

と いった、かみと つうちようを わたしました。
すると、その おんなのひとは、ちよつと かみ
を みて、まえの ほうを ゆびさしながら、

「あそこに かみが ありますから、もういちど
かいてください。」

と、かみを かえて きました。きんがくの と
ころの 0ゼロが 二にじゆうに なっているから、おか
ねを だせないというのです。

わたしは あわてました。わたしは うまれてか
ら このかた、じぶんの なまえを かいて、ひと
さまに さしだしたこと など ただの いちど
も ありません。しきじがつきゆうで 吉田よしたかずこ一子と
なんども べんきようは してきた けれど、ぎん



ここの かみに かくような じしんは まるでないのでした。そこで おろおろしながら、そのおんなのひとに、

「わたし、じい よう かかんから、あんた ちよつと かいで ちょうだい。」

と たのみました。けれども、おんなのひとは、

「だめ です。じぶんで かかなくては。」

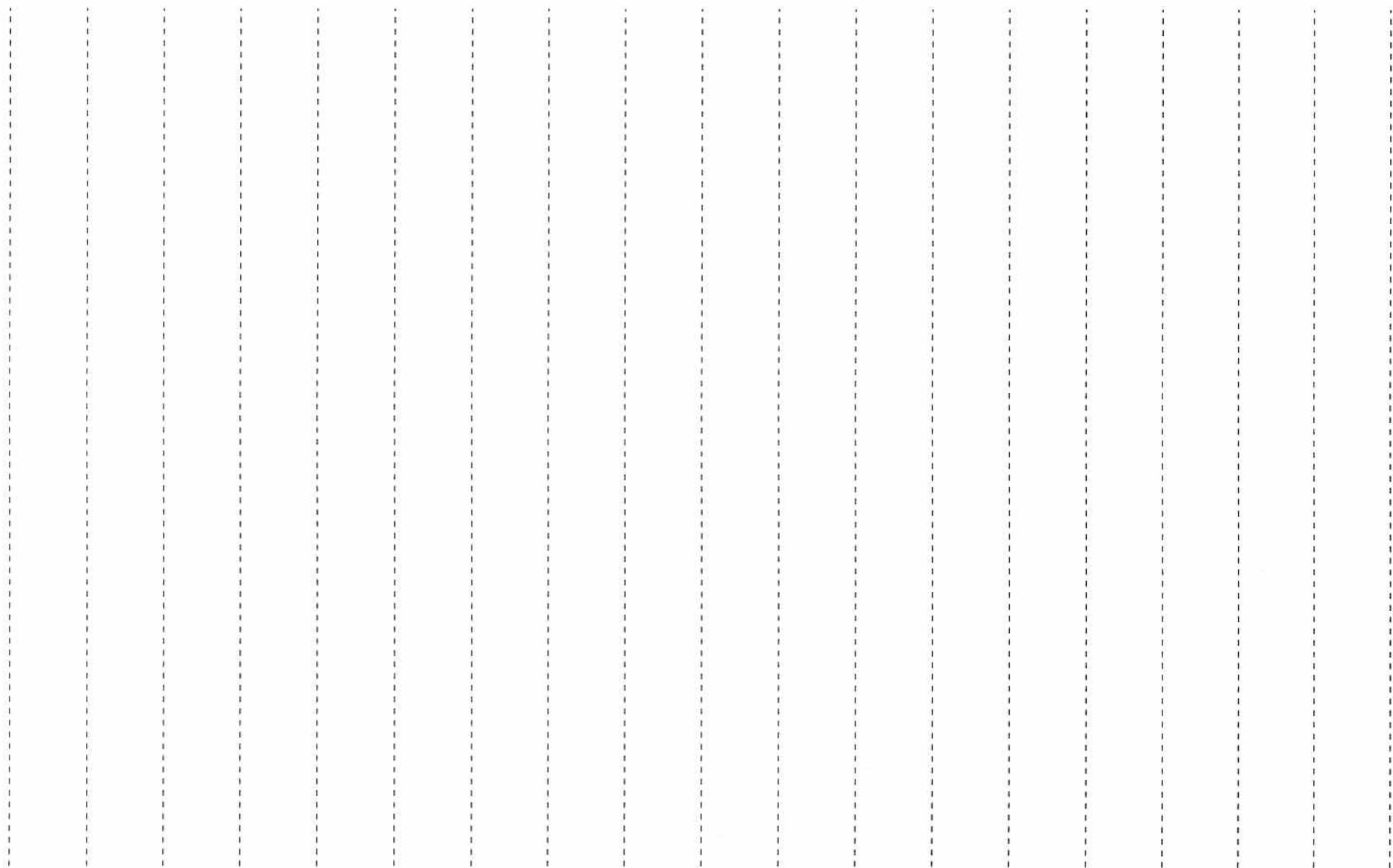
と いった、かいで くれません。わたしはもう一いちど、

「わたし、じい しらんから、これ、むすめに かいで もろたんや。せやから、あんた、すまんけど かいで ちょうだい。」

と、いっしょうけんめい たのみました。それでも その おんなのひとは、

「だめ です。じぶんで かかなくては。」
と いう ばかりです。

わたしは しかたがないので つうちょうを ひったくって かえろうと しましたが、もうひと



り おんなのひとが いたので もう一かい た
のんで みました。でも、そのひとも、いうことは
おなじでした。

わたしは おもわず ぼやいて しまいました。

「じい しらんもんは じぶんの おかねも だ
されへんのんか。」

くやしいやら、つらいやら、とても なさけない
おもいで かえって ききました。

その日の ゆうがた、順子の いえに 行って、

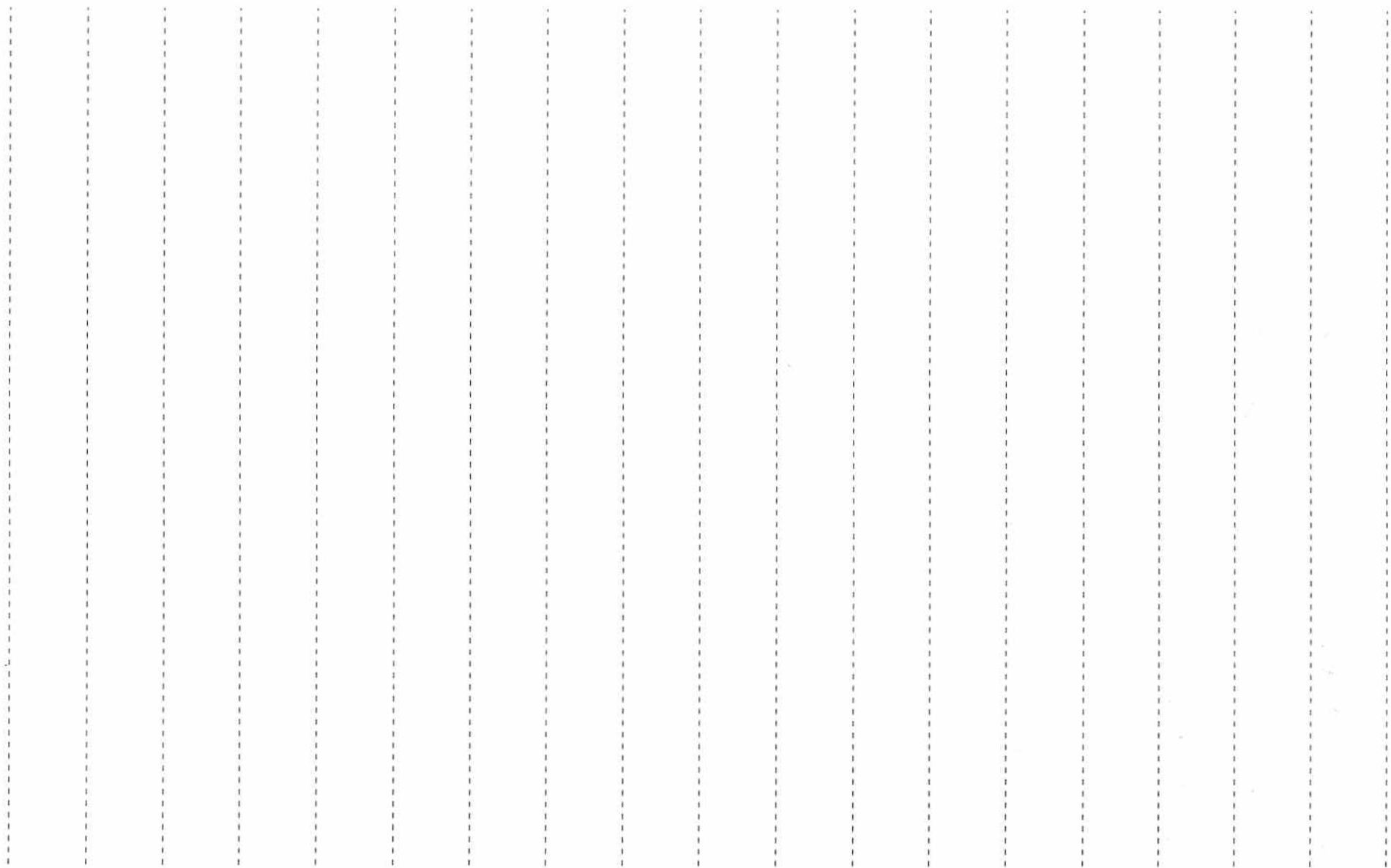
あさの ことを はなしました。そして、

「おまえが、ちゃんと かいて くれへんかったか
ら、おかね だされへんかった。」と、おこりまし
た。

すると 順子は、「いまから ぎんこうに でん
わ したる。」

と 行って、でんわを かけて くれました。

「もし もし。」



どうやら おとこのひとが でてきた ようです。でんわの そばに いたから、ぎんこうの ひとの こえも よく きこえました。順子じゅんこは、わたしは なしたことを いったから、

「じい かかれへん もんは、じぶんの おかねも だされへんのですか。」

と、おこりました。

ぎんこうの ひとが、

「いくら だしに こられたんですか。」

と、ききました。順子じゅんこが また きつい こえで、

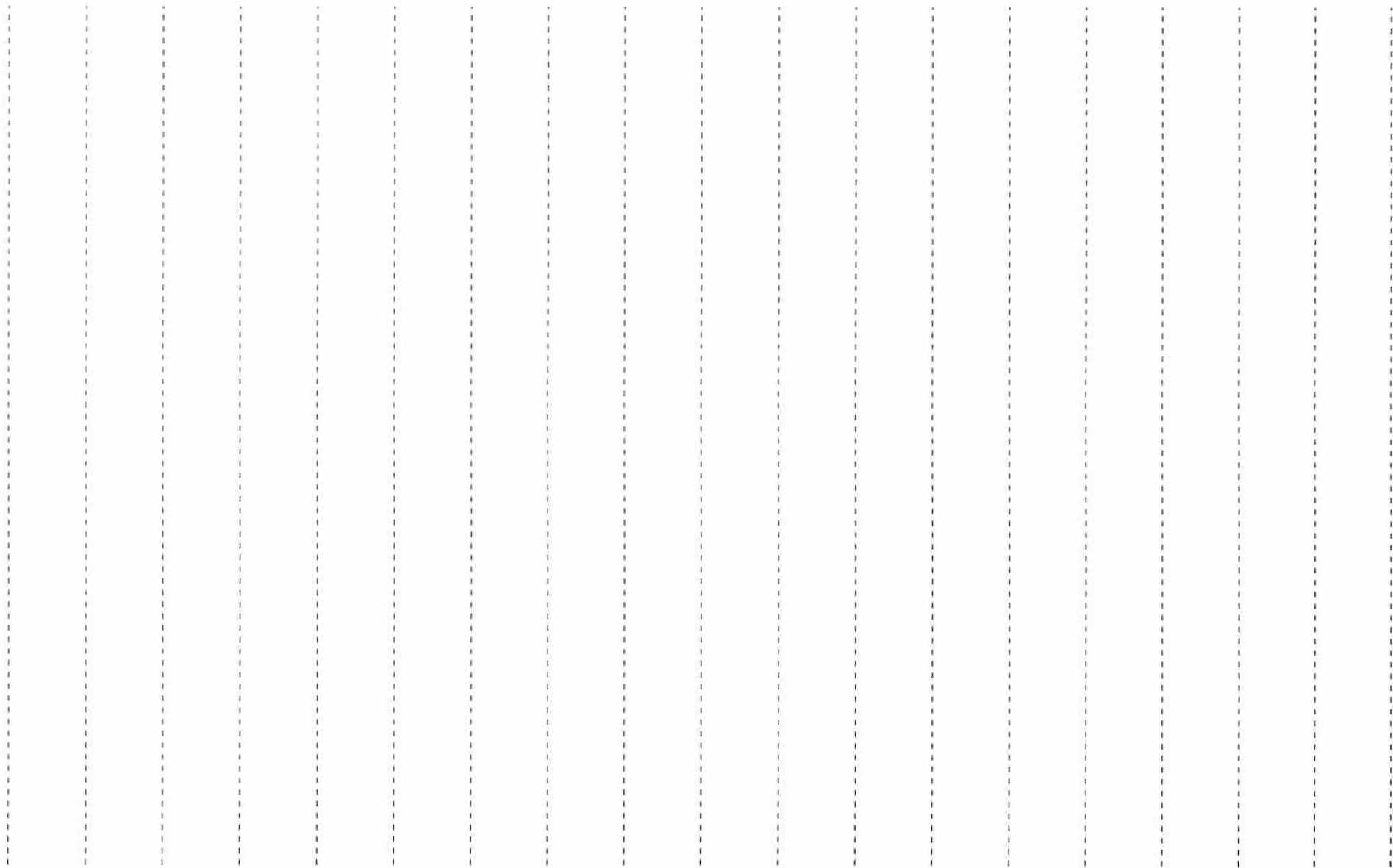
「そんな もんだいでは ないでしょ。おおきな きんがくなら かいてくれて、ちいさな きんがくなら、かいてくれないのですか。」

「もし、ての ふじゆうな しんたいしょうがいしやが こられたら、どうするんですか。」

と、いいました。

ぎんこうの ひととは、

「きほんてき には・・・」



「きほんてきには・・・」

と、おなじことを なんども くりかえし いています。
います。

順子じゅんこは、たまりかねたように、

「この よのなか、じい かける ひと ばっかり
と ちがうでしょ。おたく みたいな ぎんこうな
ら、よけいに じんけんがくしゅう していると
おもうてましたわ。」

と、いいました。

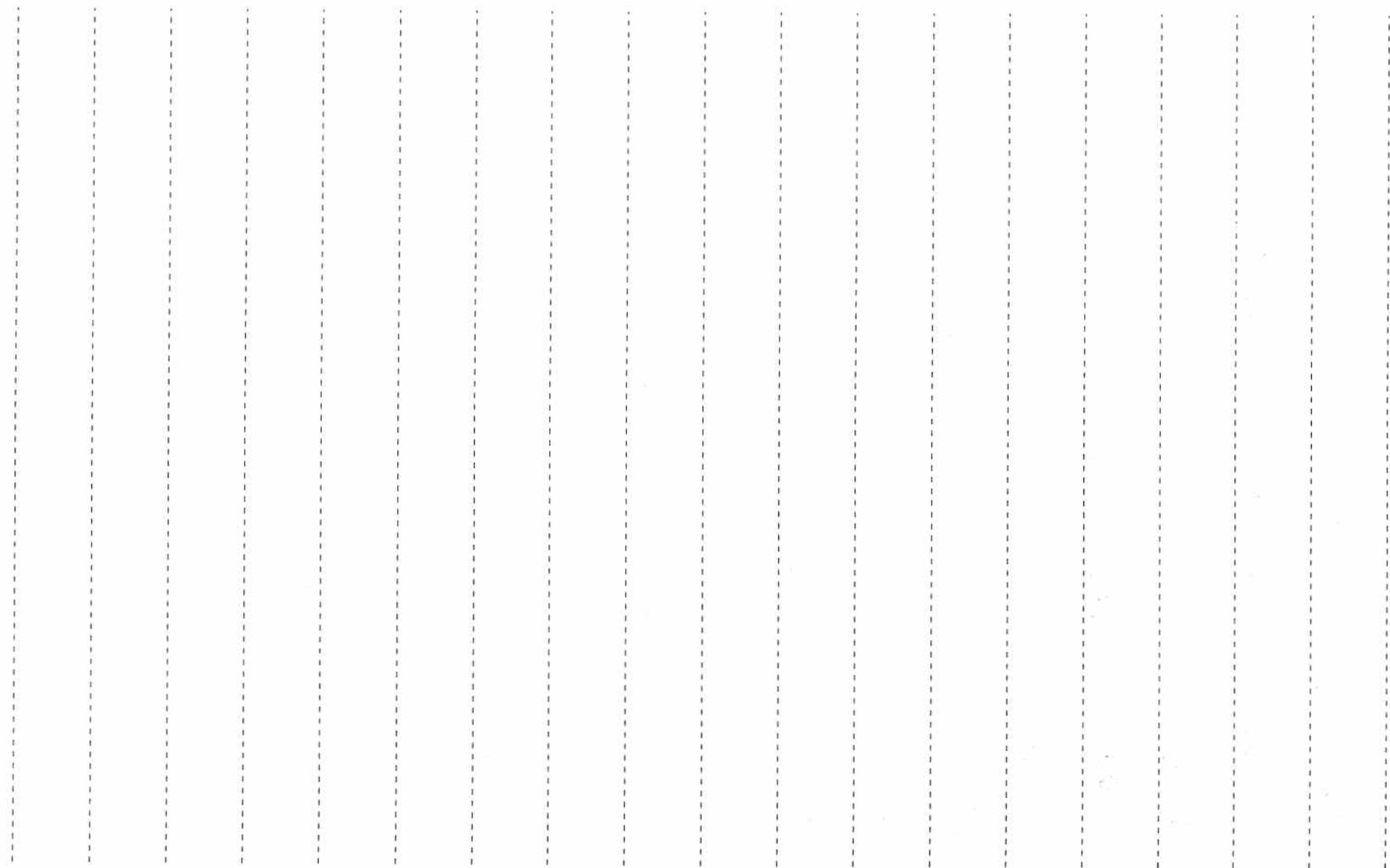
この やりとりを きいていて、わたしは もう
なさけなくて なさけなくて、

「もう いい。もう いいで、順じゅんちゃん。」

と いて、とめました。

順子じゅんこは、

「しきじへ 三さんねんも いてて、ところも なま
えも かけんで どうすんの。ほんまに くやしい
めに あわんと、ほんきに なれへんのやから。」
と、こんどは わたしに おこります。



それから わたしは むらの ふろに いき、か
えりに また 順子じゅんこの いえに よりました。そし
たら、むこが かえっていて、

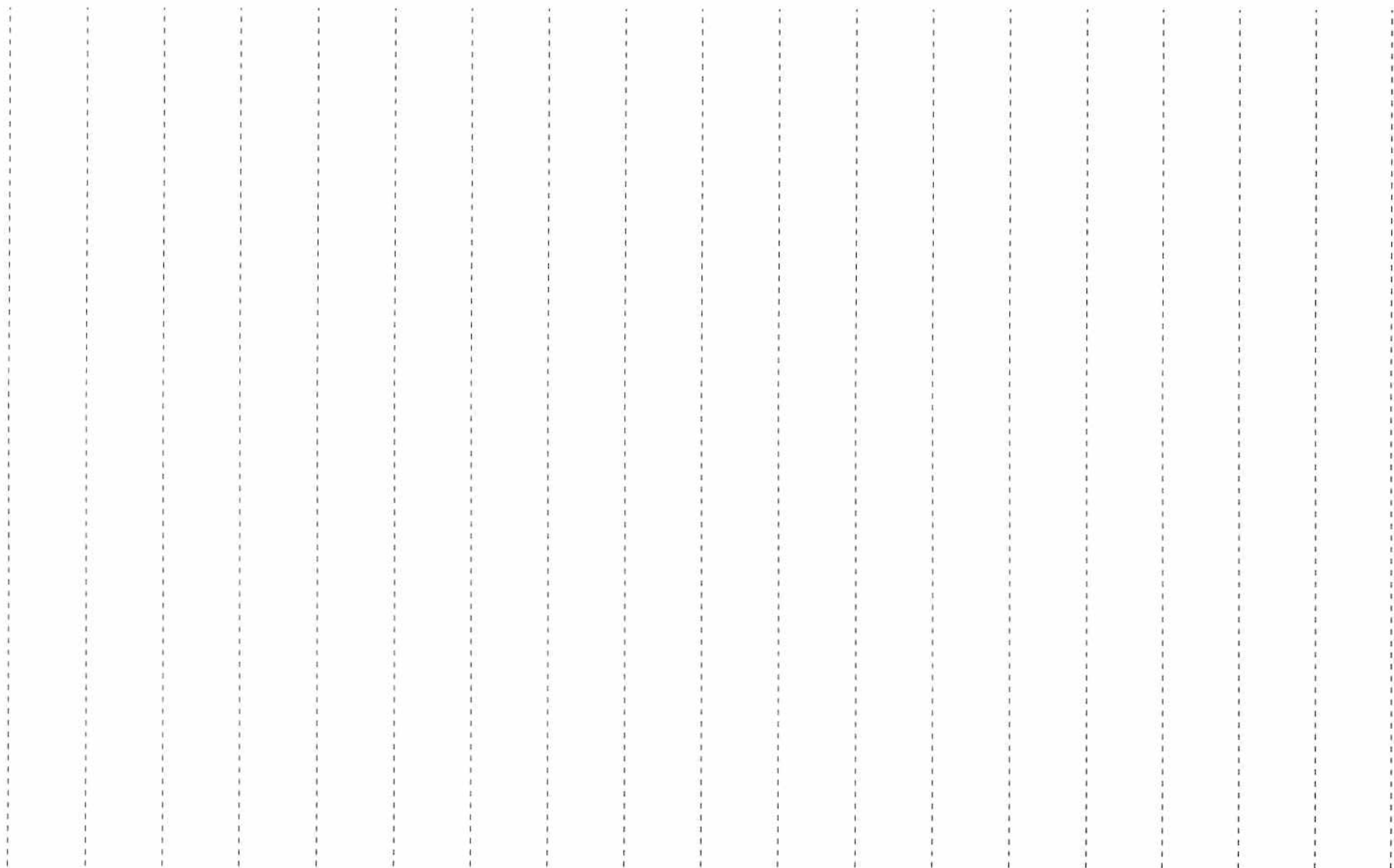
「おかあちゃん、ぎんこうから でんわ かって
きたで。なにか あったんか。」

と、ききました。ぎんこうの ひとも、やっぱり し
んぱいして くれていたのだなと おもいました。

じを なんにも しらなかつた ときは、

「ああ、そんな もんか」と、あきらめて いまし
たが、しきじで すこし ひらがなだけでも よみ
かきが できるようになった いまは、くやしくて
くやしくて なりません。もっと もっと べんき
ようして、なまえと、ところ ぐらいは、かんじで
かけるように なりたいたいとおもいました。

あくる日ひ、こんな おもいは もう したくない
と おもいながら、順子じゅんこと いっしょに、きのうの
ことを 日にっきに かきました。



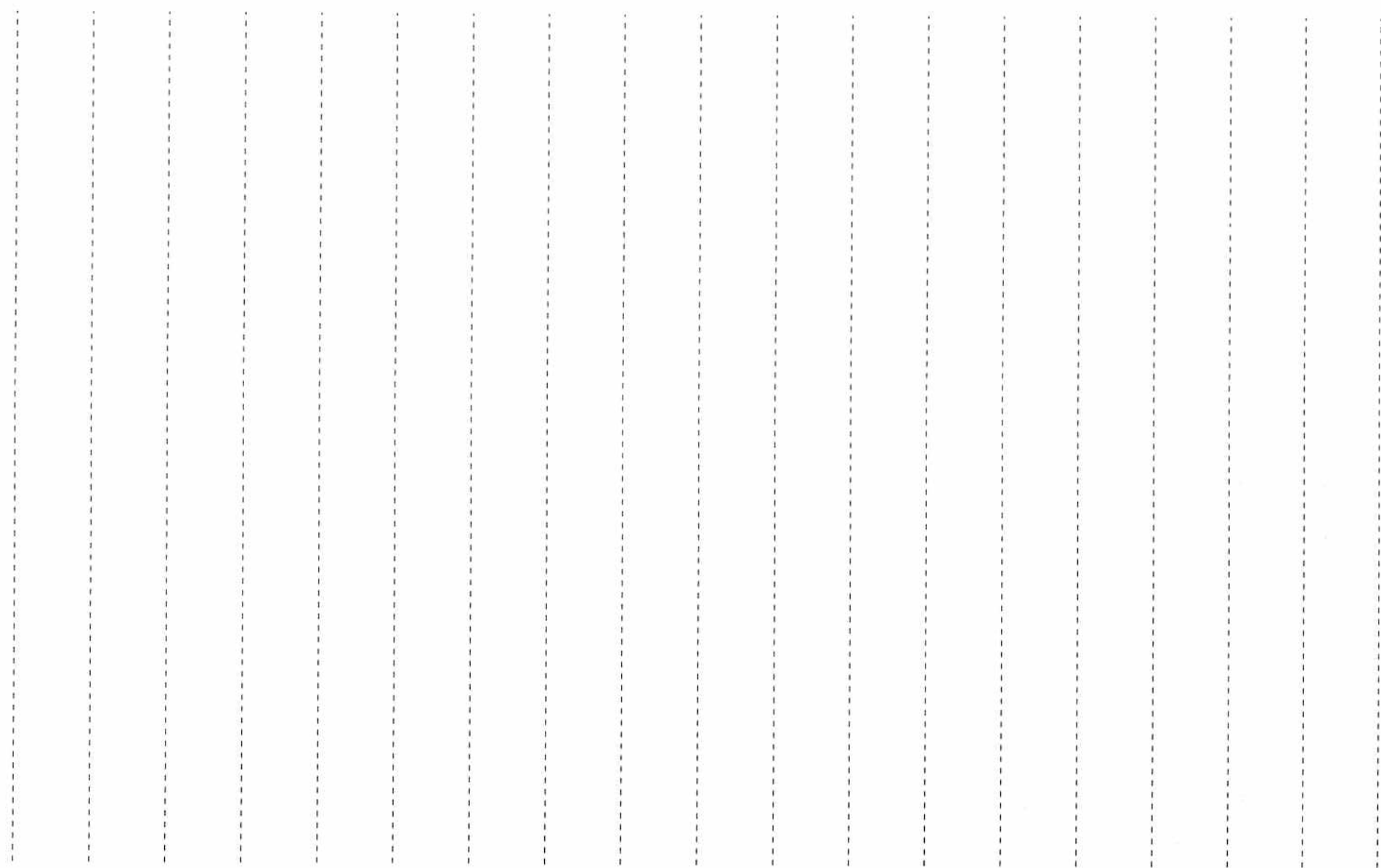
その つぎの 日は 木よう日びで しきじがっ
きゆうの日ひです。わたしは、この 日にっきを もつ
て、ところと なまえの てほんを かいて もら
いました。

その日ひから、なんども なんども けいこしまし
た。えんぴつで おおきく かいたり、ちいさく
かいたり、ボールペンで かいたり、もう なんか
い かいたか わかりません。しきじがっきゆうへ
いくと、まつさきに これを けいこしました。そ
れでも まだ ところが なかなか かけません。
すぐつまって しまえます。てほんを みないで
かけるように まだまだ けいこしなくては な
りません。

こうしの せんせいは、

「この くやしさを、つらくても うんと くわし
く かいて おきましよう。」

と いわれました。

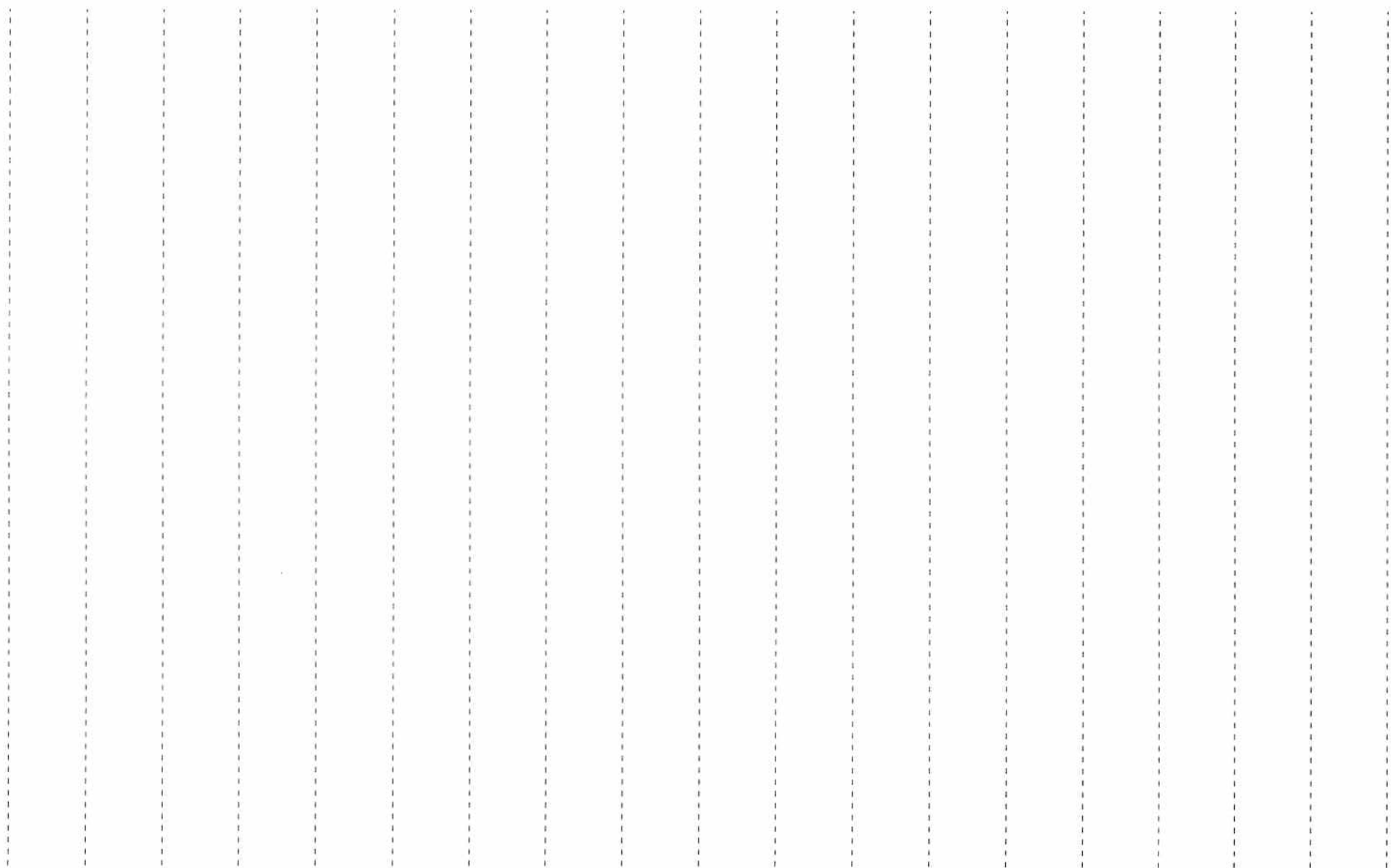


そこで また、順子じゅんこにはなしして、ちよつとくわしく かいて もらいました。それから、ひがしおおさかに いる 順子じゅんこの いもうとの 節子せつこにも はなしして、節子せつこにも かいて もらいました。日にっきよりは うんと ながく なりました。それを せんせいに みせると、せんせいは、「これを もとにして、もう一いちど ぼくと いっしよに かいて いきましよう。」と いわれました。そうして かきはじめてのがこの ぶんしょうです。

これを かく ときが、一いちばん たのしくなりました。

「このぶんしょうは、じぶんでは かみに なまえと きんがくを かいて、おかねが だせた 日ひまで つづけましょう。その日ひの ことを かいて、このぶんしょうを おわりに しましよう。」

と、せんせいは なんども いわれます。わたしも、そうしたいと おもいました。



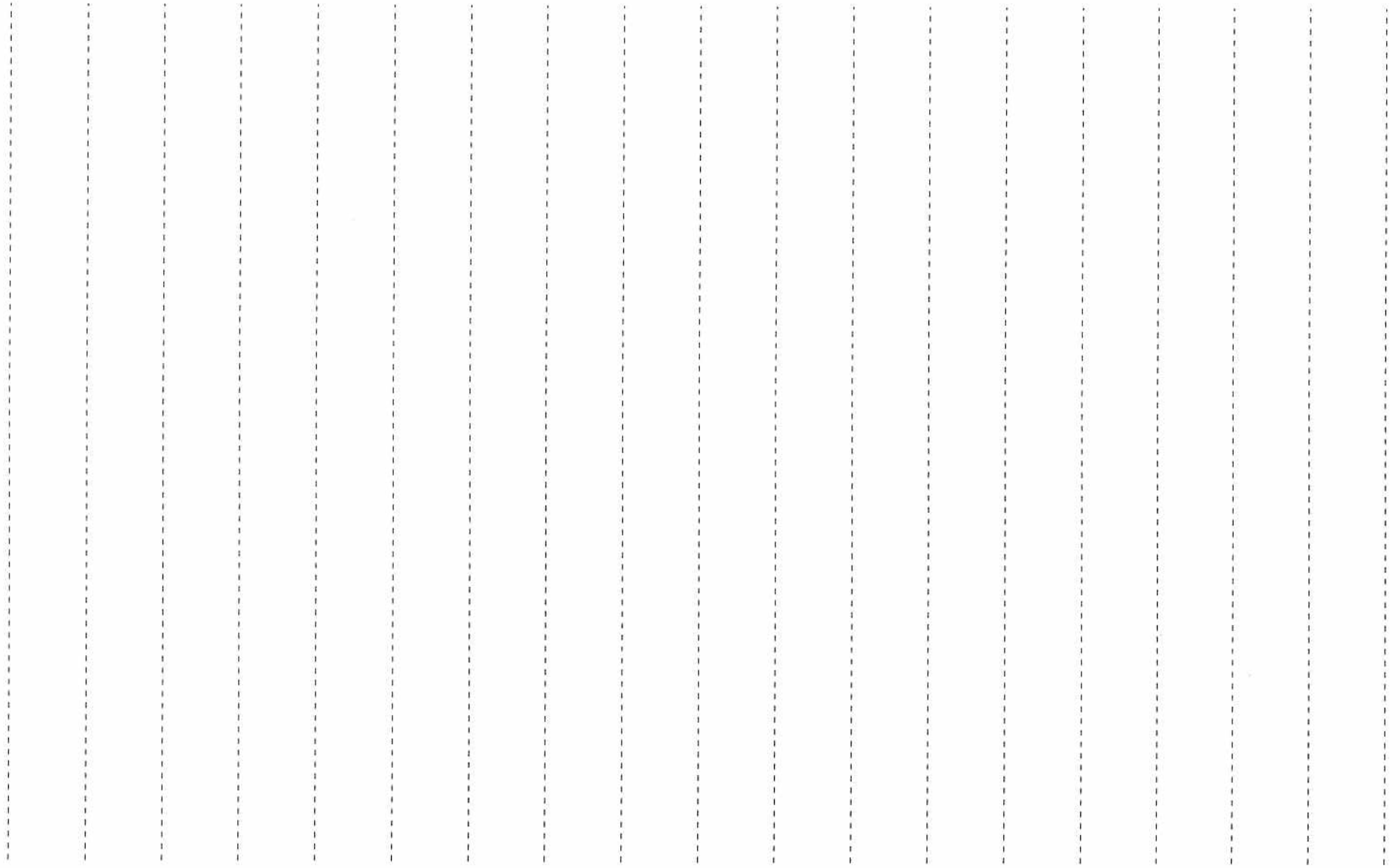
としが かわって 三月二日の あき です。四月八日から 一しゅうかん、四こくに おまいりにいくので、十まんえん ださなければ なりません。

こんどこそ、じぶんで かみに かいで、ぎんこで おかねを おろして こようと おもいました。

けれど、また 「まちがってる」と いわれなにか しんぱいです。それで やっぱり 順子にも かいで もらいました。もし、わたしの かいたので とおらなかつたら、順子に かいで もらったのを だそうと おもったのです。

一ねん かかって やつと ためた 十まんえんです。これで おろして もらえるやろか、しんぱい しながら、ボールペンに しっかり ちからを こめて かきました。

それを もって、ぎんここの まどぐちにいき、おそるおそる、



「きょう、はじめて かいで きたんやけど、これで いけますか。」

と いった、つうちようと わたしが かいた ほうの かみを さしだしました。

まどぐちの おんなのひとは、にっこり して、「いけますよ。」

と、いった くれました。ほっと しましたが、まだ しんぱいです。

しばらく まえに たっていると、

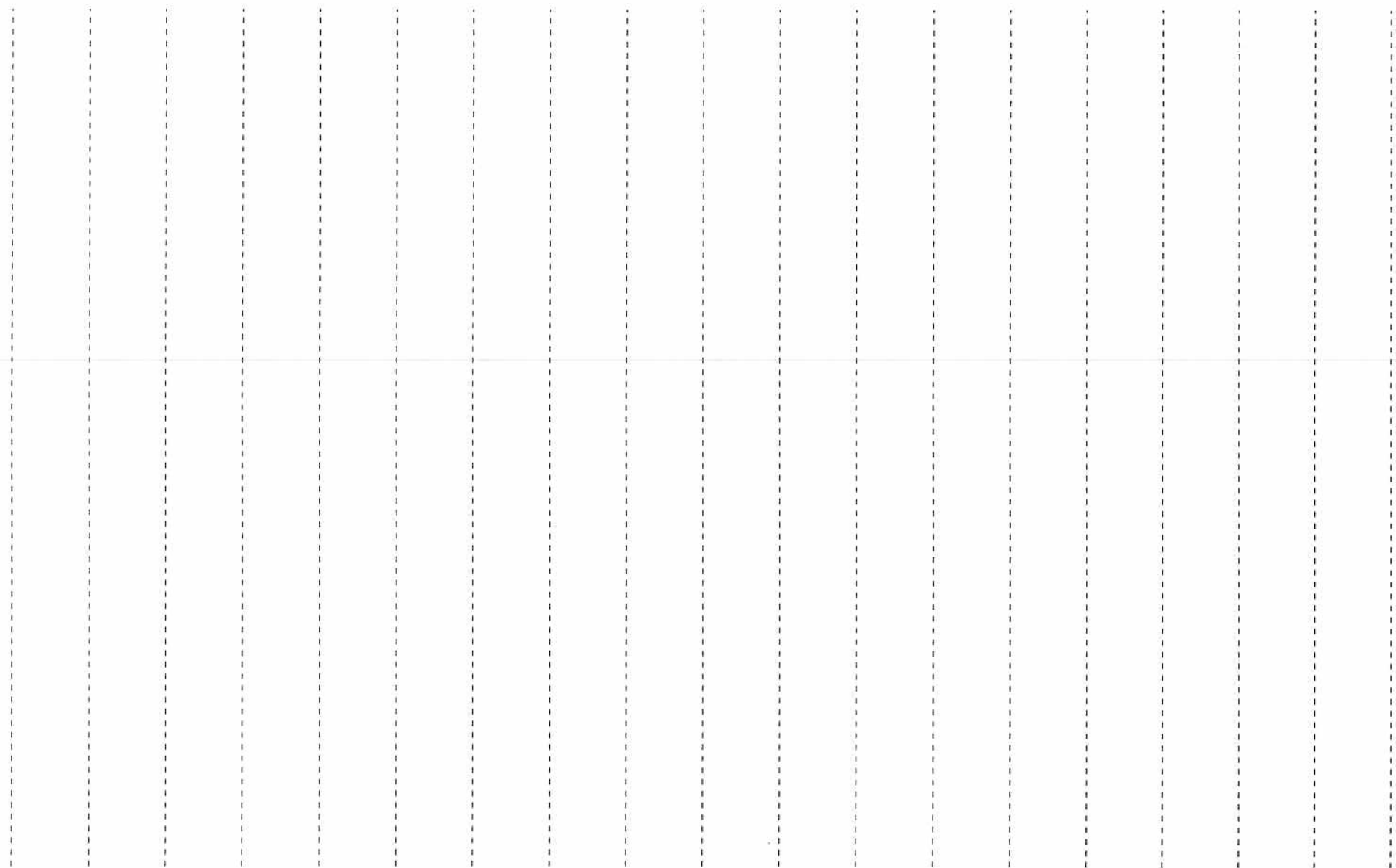
「吉田^{よしだ}さん。」

と、よんで くれて、十^{じゅう}まんえんと いっしょに つうちょうを かえして くれました。

うまれて はじめて、わたしの かいだ じで、おかねが だせたのです。うれしくて うれしくて、なみだが でききました。

あくる日^ひの あき、順子^{じゅんこ}がきたので、

「きのう、わたしが かいだ かみで、おかね だ



して きたで。」

と、はなしました。順子じゅんこは

「よかったなあ。」

と、よろこんで くれました。

その 日は、しきじがつきゅうの 日ひ でした。
みんなに、

「きのう、じぶんの じいで、おかね、おろしてき
たで。」

と、ほうこく しました。みんなが、

「よかったね。もう だいじょうぶや。」

と、はげまして くれました。

これで、やっと この ぶんしょうを おわりに
する ことが できました。

せんきゅうひやくきゅうじゅうよ
(一九九四ねん さんがつきんじゅういちにちに 三月三十一日)

※ 本書は、吉田一子さんの文集『なまえをかいた』から「わたしの
おかね なのに」を掲載しました。吉田さんは、この作品などで、
一九九五年、第二十二回部落解放文学賞に入選されました。

わたしの おかね なのに

著者 吉田一子

識字・日本語センター

〒五五六・〇〇二八

大阪市浪速区久保吉一・六・一二

大阪人権センター三階

電話・FAX 〇六（六五六二）九九八八

※ 本教材が必要な場合は、識字・日本語センターまでご
連絡ください。電話の受付は、平日の午後一時～五時で
す。送料を負担していただく場合があります。

※ 本書は、平成十三年度文部科学省委嘱「識字・日本語
読み書き学習における教材研究事業」の一環として、
大阪府教育委員会が発行しました。

【参考】

○ 吉田一子さんの識字作品を集めた文集

『なまえをかいた』(吉田一子)が、自費出版されています。関心がある方は、下記までご連絡ください。

大阪府富田林市若松町1-9-12

富田林市人権協議会 TEL 0721-24-3700



○ お話しのモデルになった吉田一子さんの通う識字教室

に関わる人が中心に集まった有志の会が作成した絵本が『ひらがなにつき』です。

文 若一の絵本制作実行委員会 絵 長野ヒデ子

解放出版社 2018年



○ NHKドキュメンタリー番組、「ETV特集・なまえをかいた～吉田一子・84歳～」で、

吉田一子さんの学び、生きる姿が紹介されています。映像は、瀬戸会館に保存していますので、視聴されたい方は、瀬戸会館までご連絡ください。